

藤原道長が見上げた満月を見よう！ 参考資料

◆はじめに

「この世をば 我が世とぞ思ふ 望月の 欠けたることも 無しと思へば」……ときの最高権力者・藤原道長が詠んだこの歌を、歴史の授業などで目に(耳に)したことがあるという人も多いのではないのでしょうか。実は今年、彼が詠んだ“望月”とほぼ同じ月を私たちも眺めることができます。2024(令和六)年11月16日……ほんの少しだけ欠けた、ほぼほぼ満月の十六夜の月です。奇しくも今年はNHK大河ドラマ『光る君へ』が放送中。ドラマでは、藤原道長は準主人公的な位置づけです。この歌を詠むシーンは第44回(11月17日放送回)で描かれるそうです。

そこで、この2024年11月16日という日に、私たちも月を見上げ、そしてそのことを共有しませんか？月が、晴れていれば日本中どこからでも見ることができます。その夜に月を見つめることで日本中の人と、そして千年以上むかしの人とつながることができるのです。月を見上げたら、ぜひ、月を見た！ということハッシュタグ #道長と同じ月を見上げよう を添えてSNSに投稿してください。月はスマホでもかんたんに写せますので、よければ写真も一緒に！



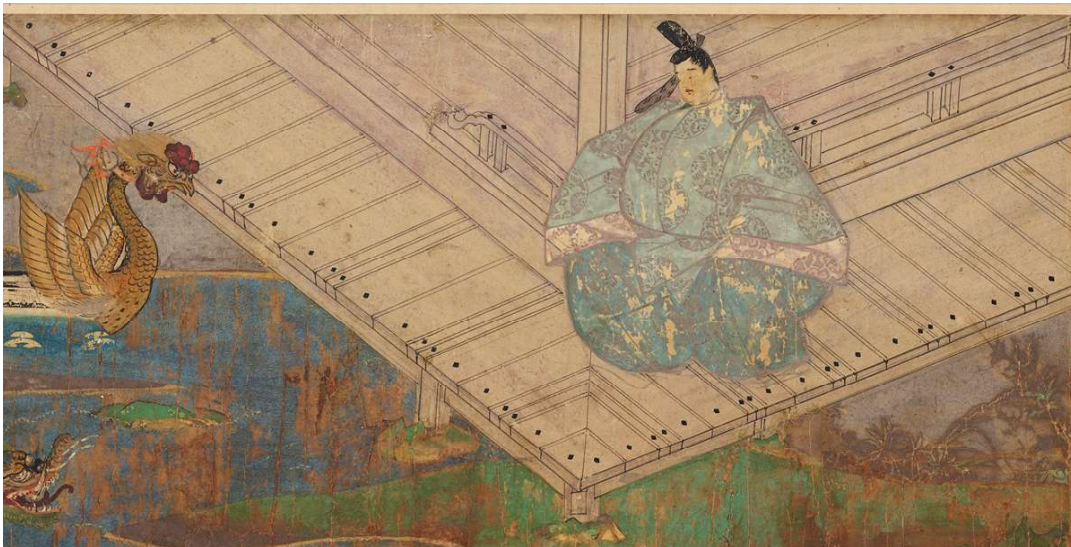
Virtual Moon Atlas で再現した、道長が見上げた望月

『小右記』(写本)の“望月の歌”該当箇所
Credit: 国立公文書館

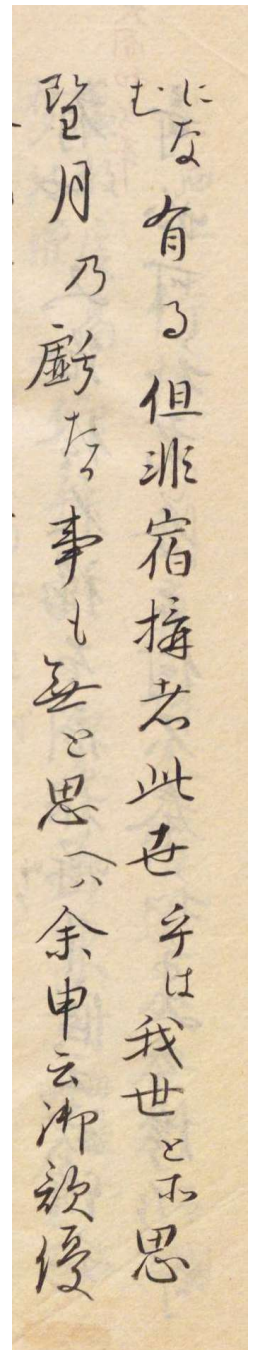
◆千年の時を越えて

この世をば、の歌(以下、望月の歌)は、今からおおよそ千年前、寛仁二年十月十六日=西暦1018年11月26日に詠まれました。この日、藤原道長の三女・威子が後一条天皇の中宮となり、それを祝う宴が催されました。摂政・藤原頼通以下ほとんどの公卿が出席し、道長も上機嫌だったそう。そんな宴もたけなわのときに詠まれたのが望月の歌。大納言・藤原実資にあらかじめ返歌を求めると、実資は白居易の故事を引いて素晴らしい歌なので皆で唱和することを逆提案。場の一同で斉唱した、そんなエピソードが残されています。

ところで、望月の歌は藤原道長の日記『御堂関白記』には記録されていません(歌を詠んだことは記されている)。道長自身が「あらかじめ用意したものではない」と話していたことが藤原実資の日記『小右記』に残されていますので、その場の思いつきというか、気分が高まって詠んだ歌なのでしょう。そう、この歌は実資の手によって『小右記』に記され、後世に伝えられたものなのです。酔った勢いで(?)詠んだ歌が人の日記に記されて千年後まで残る……道長が知ったらどう思うのでしょうか？(笑)



『紫式部日記絵詞』に描かれた藤原道長 Credit: 藤田美術館



◆苦勞と幸運の人・道長

望月の歌は、しばしば権勢を極めた藤原道長の驕りの歌と解されることがあります。ここで和歌の解釈に深入りするつもりはありませんが、本当にそうでしょうか？(山本淳子・京都先端科学大学教授は“世”を“夜”と解釈し、月＝皇后と解し望月は三后を占めた娘たちを表わしているという説を提唱しています)

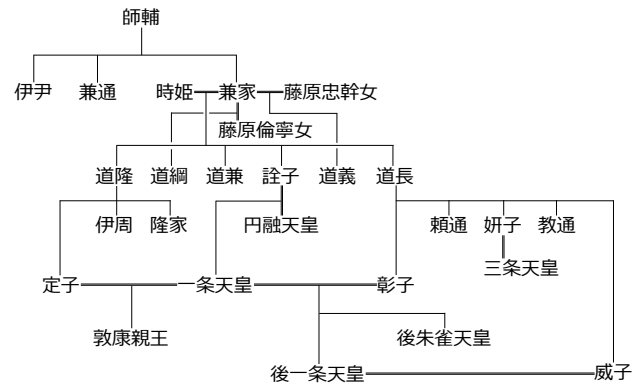
藤原道長は藤原兼家の三男として生まれました(異母兄を含めれば五男)。長子相続が当たり前ではなかった時代とはいえ、長兄・次兄が控えている以上、大きな出世は望めない可能性もありました。そもそも父・兼家も長男ではなく三男。長兄・伊尹没後の次兄・兼通との確執はつとに有名です。それでも最終的に藤原北家嫡流の座を確たるものにした父の姿を見て、道長はどう思ったのでしょうか。

父・兼家卒去後は順当に長兄・道隆が関白の座に収まります。しかし、糖尿病とみられる病を患っていた道隆は43歳の若さで没し、その後を次兄・道兼が襲うも関白就任後わずか十日ばかりで流行り病に罹り息を引き取ります。偶然が重なり道長にお鉢が回ってくることになったのです。とはいえ、事はすんなりとは運びません。当時、道隆の子・伊周がすでに官位で道長を超える内大臣となっており、しかも彼は一条天皇の寵愛著しい中宮・定子の兄でもあります。一条天皇の心の中では道長よりも伊周を関白に任じたいと思っていたようです。ここで動いたのが一条天皇の生母であり道長の実姉である皇太后・詮子です。歴史書『大鏡』には一条天皇の夜の御殿(寝室)にまで押しかけ、泣いて道長を関白に任じるよう訴えたと記されています。こうして道長は右大臣に任じられ、関白に準じる職である内覧に就きました。当時、関白はもちろんのこと左大臣も空席でしたから、道長は一举に政権首班の座に登り詰めたことになります。

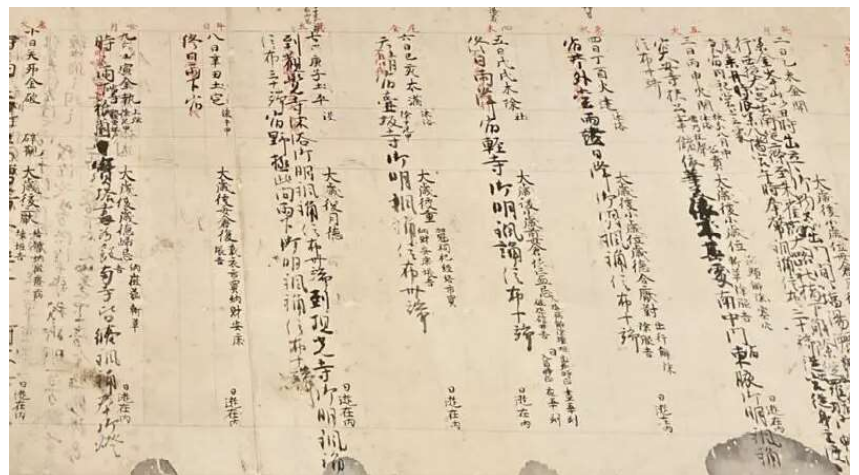
ところで、道長の日記が『御堂関白記』と呼ばれているため彼が関白に任じられたと思われがちですが、道長は終生、関白には就いていません。そもそも関白は臨時職であり、職権として決裁権がありません。あくまで最高権者である天皇の“後見”なのです。また、政府の最高議決機関である太政官には、たとえ大臣を兼任していても摂関は関与できない決まりでした。そこで道長は右大臣(後に左大臣＝太政官の実質トップ)として太政官を掌握しつつ、関白と同等の権限を持つ内覧を兼任することで権力を行使しようとしたわけですが、名より実を取ったと言えるでしょう。

話を元に戻しましょう。道長は娘にも恵まれていました。正室である倫子との間に生まれた彰子、妍子、威子、嬉子はみな天皇に嫁ぎ、彰子は一条天皇との間に後一条天皇と後朱雀天皇を、嬉子は後朱雀天皇との間に後冷泉天皇をそれぞれ設けています。その結果、道長は後一条天皇、後朱雀天皇、後冷泉天皇の外祖父として摂政に就任、さらなる絶大な権力を手にすることになったわけです。件の

<関係者略系図>



『紫式部日記繪巻断簡』に描かれた中宮・彰子(中央右の背を向けている女性)手前の男性が藤原道長、中央左の赤子を抱えている女性は道長の妻(彰子の母)倫子、抱かれている赤子は敦康親王(後の後一条天皇)。



『御堂関白記』(複製) Credit: 国立歴史民俗博物館

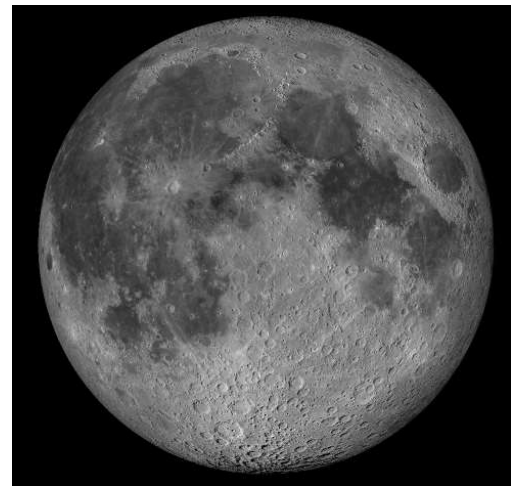
威子立后に際しては、太皇太后(先々代の天皇の皇后)が彰子、皇太后(先代の天皇の皇后)が妍子、中宮(皇后)威子と三后をすべて道長の娘が占める「一家三后」を成し遂げています。これに対し藤原実資は「未曾有」と日記に記しています。このように“運”と“人”に恵まれて着実に権力の階段を上がっていった道長ですが、一方でしばしば病に悩まされ、大病を患うことも一度や二度ではありませんでした。晩年には兄と同じく糖尿病に罹り、それが原因で病没したとも言われています。怨霊に脅かされることもめずらしくなく、これは彼の経歴を考えると当然と言えなくもないですが、彼の気弱な一面が垣間見えます。ですから、望月の歌を詠んだときの彼の心境は、誇ったとか奢ったとかいう傲慢なものではなく、ようやくここまで来たというような慨嘆に近いのではないのでしょうか。

◆望月だからこそ

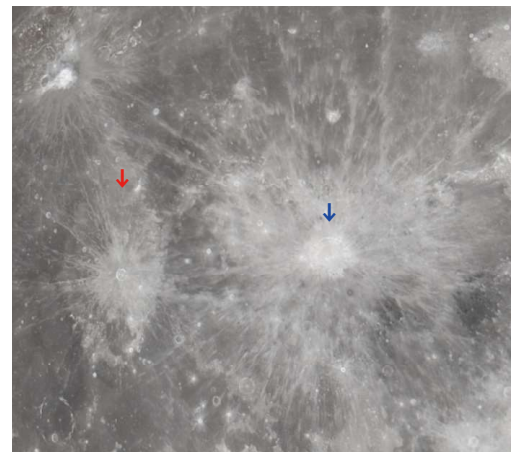
ところで望月＝満月は、星を見るのが好きな人たちには嫌われがちです。満月は太陽に次ぐ明るさで、煌々と夜空を照らし周囲の星たちの光をかき消してしまいます。そして、日没とともに昇り日の出とともに沈む……つまり一晩中空にあるわけで、満月前後の日の夜は星を見るのに適さないのです。また、満月は望遠鏡で覗くにも不向きです。月の正面から光が当たっているため地形による影がほとんどできず、クレーターや山脈といった月の凹凸がわからず、のっぺりとして見えてしまうのです。月を望遠鏡で覗く醍醐味のひとつは地形による立体感を楽しむことにあるでしょう。それが満月だと失われてしまうのです。

しかし、満月だからこそ見えるものもあります。まず、「海」の配置がわかりやすく、いわゆる“ウサギの餅つき”もよくわかります。国が違えば見立てるものも変わる……皆さんには、月の模様は何に見えますか？また満月前後の月だからこそ見やすい模様「光条」があります。光条はクレーターがつけられたときに周囲に飛び散った物質(レゴリス)が明るく見えているもので、ティコやコペルニクスといった比較的新しいクレーターの周囲に見られます。

月の明るさを特に実感できるのも満月前後の月でしょう。よく、満月であれば月明かりだけで新聞が読めるなどと言われます。満月の明るさは-12.7等級。11月16日であれば夕方方の西の空に見える宵の明星・金星の1,500倍以上も明るいのです。照度で表すと満月の明るさは0.25ルクスほど。防犯灯1つの照度が1.0～5.0ルクスだそうなので、それには及ばないものの、たしかに字を視認することはかんたんにできます。都市部ではなかなか月明かりを実感することができませんが、11月16日はぜひ室内の照明をすべて消して、月を眺めてみませんか？



Virtual Moon Atlas で再現した、2024年11月16日の満月



コペルニクス・クレーター(青矢印の先)とケプラー・クレーター(赤矢印の先)の周囲に見られる光条

◆変わらぬ光、変わる月世界、移ろう世



平塚市内のお宅の十五夜のお供えの例
お月見は今でも続く月を愛でる風習の一つ。お供え物には地域色があり、平塚など神奈川西部から北部では豆腐を供える風習がある。

道長が歌を詠んだ、あの宴が開かれてから千余年。今も月は変わらぬ明るさで私たちに照らしてくれています。古来、月に親しんできた日本人。月が昇ってくるのを見るとホッとするという人も多いのではないのでしょうか。

しかし、歌曲『荒城の月』に「天上影は変わらねど 栄枯は映る世の姿」と歌われているように、月の光は変わらずとも人の世は移ろいます。栄華を極めた藤原摂関家も道長の息子たちの代になると天皇の外祖父としての地位を失い、やがて院政が開始されると摂関ではあり続けられたものの政治の実権は手放さざるをえなくなります。その後は武家が台頭、度重なる内乱

を経て院すら国政の中樞から外されてしまいます。時代が下って戦国時代末には、羽柴(豊臣)秀吉が関白に就任。形としては近衛(藤原)前久の猶子となつたうえでの関白任官ではありましたが、結果として藤原氏は公家の首座たる関白の地位すら武家に奪われてしまうのです。……月は、そんな世の盛衰をずっと見つめてきたことでしょう。



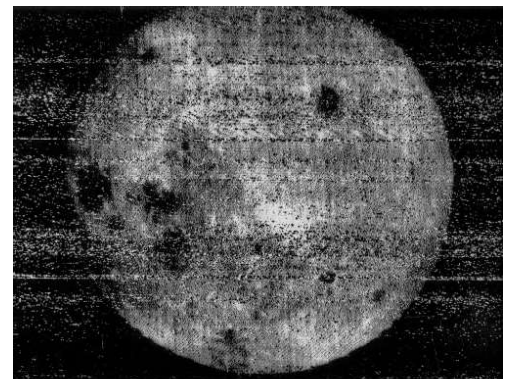
藤原忠通肖像(『天子撰関御影』第2巻より)
藤原忠通は藤原道長の子・頼通の曾孫。摂関政治が形骸化していた時代にあつて、院の近臣や平氏と巧みに結びつき、その地位を保ち続けた。その後、豊臣秀吉などの例外を除き、原則として彼の直徑子孫(いわゆる五摂家)のみが明治維新まで摂関を独占することになった。



豊臣秀吉像
秀吉は1585年、形式上は近衛前久の猶子として、藤原氏以外で初めて関白に任官した。日本史上、初めて関白の職に就いたとされる藤原基経以降、断続はあれど千年近く関白は置かれ続けたが、藤原氏以外で関白となったのは秀吉とその甥である秀次のみである。

一方、私たちの月に対する認識と理解は大きく飛躍しました。現代科学は月の(他の惑星の衛星と比較したときの)特異性を明らかにし、また月の起源の解明に迫りつつあります。今から65年前の1959年にはそれまで誰も見ることが叶わなかった月の“裏側”を探査機が撮影、その9年後には人類が月の“裏側”を直接視認するとともに月面から昇る青い地球の姿を目撃します。翌年1969年には人類が月に降り立つのです。今や月は眺め憧れるだけの対象ではなくなりました。現在は、第2の人類月着陸計画「アルテミス計画」が進行中。もしかしたら、2020年代が終わる前に人類は再び月面に足跡を残すかもしれません。その数年後には日本人宇宙飛行士が……。やがては人類が月に“暮らす”時代もやってくるのでしょうか。

とはいえ、いくら月の理解が深まろうとも、日常的に地球と月の間の行き来が行われようとも、月に対する憧憬が失われることはおそくないでしょう。私たちにとってもっとも身近な天体の一つである月。2024年11月16日の夜に限らず、今後もぜひ見上げ続けてみてください。



ソ連(当時)の月探査機ルナ3号が史上初めて捉えた月の“裏側”



アポロ8号の乗組員が撮影した「地球の出」 Credit: NASA



アルテミス計画で月に降り立つ宇宙飛行士の想像図 Credit: NASA



道長と同じ月を見上げよう